

地方公務員 file

風を起こす

絆が織り成すハーモニー

北九州市子ども家庭局子ども家庭部子ども家庭政策課長

愛甲 秀則さん

仕事だけじゃない。プライベートだけじゃない。両方に全力投球し、その相乗効果でさらにパワーアップする…なんてこと、なかなか実行できるものではない。

北九州市職員・愛甲秀則さん。またの名を「美川憲二」と「ラブリー郷」。二〇年にわたりボランティア芸人としても活躍してきた、そのパワーの源は何だったのだろうか？

短期間での事業実現を可能にしたのは…

右肩上がりの成長を続けていた時代。製鉄の町として全国にその名をとどろかせていた北九州市は、今、「人にやさしく元気なまち」への脱却を図っている。主要プロジェクトのトップに掲げられているのは「子育て日本一」を実現できるまちづくりの推進。子育てふれあい交流プラザ「元気のもり」は、その拠点となる施設である。

小倉駅からほど近いアジア太平洋インポートマート（AIM）の三階にある「元気のもり」は、連日、多くの親子連れで賑わう。三〇七八㎡の敷地の核となるのは、建物の柱を森の大木に見立てたプレイゾーン。木の砂場や滑り台、メリーゴーランドなど木製のおもちゃがいっぱいの「木の広場」、壁一面に自由にお絵描きできる「落書き広場」、冬でも水遊びができる「水の広場」など子どもの五感を刺激する工夫が随所にあふれる。

[あいこう ひでのり]

昭和29年、福岡県北九州市生まれ。八幡大学（現九州国際大学）法経学部法律学科卒業。昭和49年、北九州市役所入所。教育委員会青少年課を振り出しに、経済局商工観光課、東京事務所等を経て、平成20年より子ども家庭局子ども家庭政策課長。高校時代、新聞部で甲子園の取材経験を持ち、現在は「愛植生（あい うえお）」のペンネームで作詞・作曲もしている。





(写真左) 平成17年、新潟県中越地震の被災者を慰問した際にはテレビ局の取材も受けた



(写真右) 木の温もりが子どもたちを包み込む「元気のもり」のプレイゾーン

保護者向けにも、子どもを家庭内の事故から守る方法を学ぶ「セーフキッズ」のほか「子ども一時預かり室」「リフレッシュルーム」と子育てをサポートする設備が整う。

対象とする子どもは就学前までだが、来場者は予想の年間二〇万人を大幅に上回る五〇万人。行政関係の視察者も年間一五〇〇人を超えるほど注目を集める「元気のもり」の仕掛け人の一人が、子ども家庭局子ども家庭部子ども家庭

政策課長の愛甲秀則さんだ。

「平成一五年、北九州市の重要課題であった少子社会対策を進める拠点として、子育て支援施設の計画が持ち上がりました」

と振り返る愛甲さんは、当時単身赴任していた東京事務所から呼び戻され、音頭を取った。

「通常だと最低五年はかかる事業に、与えられた期間は二年。急ピッチでの事業実現に正直、不安はありましたよ」

だが、さまざまな分野の専門家の知恵を拝借し協力を得ながら、平成一七年の年の瀬も押し迫った十二月二三日「元気のもり」はオープンした。

こだわったのは「子どもの目線」。子どもたちがどうやってたら喜んでくれるのか、孫娘のさあちゃん顔の顔を思い浮かべながら、プロジェクトを推進した。目指したのは「世代を越えて子育てを

楽しみ、楽しめる広場」。市の目玉事業として期待がかかるが、事業期間の短さを言い訳にできない。

「無理に思えることでも、頭からできないと決めつけるのではなく、とりあえずやってみることで新しい道が開けてくるんですよ」

愛甲流哲学が、事業推進の大きな原動力になった。

転機はバナナの叩き売り？

「とりあえずやってみる」ことの大切さを、愛甲さんは「バナナの叩き売り」から学んだ。

商工観光課にいた昭和六三年、市制二五周年を記念して開催された「第一回わっしょい百万夏まつり」では、プログラムの一つとして「オリジナルバナチャンコンテスト」を企画した。北九州市門司港はバナナの叩き売り発祥の地。オリジナルの口上と節回しを競うコンテストを盛り上げるべく、担当課からも出場することになり、愛甲さんは、同じ課の大川博巳さんとコンビを組んだ。

お殿様よろしくちよんまげカツラに袴を身に着けた愛甲さんと、狸と見まがうメイクでおかめ姿に扮した大川さん。奇抜なコンビが繰り広げる名調子の「北九州観光流バナちゃん節」に、会場からは大きな歓声が湧き上がった。

「まさか、あれほどウケるとは思いませんでしたね。舞台に立つ前は恥ずかしさもあったのですが、市民の皆さんが喜ぶ顔を見たら、そんなの吹き飛んでしまつて。思い切つてやったことで、壁を一つ、突き抜けることができました」

このときの成功体験が、愛甲さんのチャレンジ魂に火をつけた。翌年、まちおこしを目的に企画したのは「ヒヤガーデン」。

「ヤガーデン」？
「寒くて家に閉じこもりがちな冬に、あえて屋外に出てみんなで楽しもうというイベントなんです」

一見、無謀とも思える企画だが、意外にもこのイベントは大ヒットした。

会場は、夏ならビヤガーデンとなるデパートの屋上。酒類をはじめ焼き鳥、焼きソバなどの露店が軒を連ね、仮設ステージでは歌謡ショーの歌声が響く。参加費は無料で、飲食券は二〇〇〇円の前売り券で二二〇〇円分が使えるシステムとした。

冬空の下のいわば「市民大望・年会」。オトナの遊び心に、新しいものの好きの市民たちはおおいに盛り上がり、その姿はテレビや新聞でも報道された。

二年目以降は、会場を市役所前にある小倉城本丸広場に移し、いつしか冬の風物詩として市民に親しまれるほど



2008年11月9日に初開催された「北九州市職員芸人バンクフェスティバル」のチラシ。市職員意外な芸達者ぶりに市民から声援が送られた

になった。

「開催にあたっては市民組織の北九州市を愛する友の会」を結成し、チケット販売からステージ設営、料理づくりまですべてを五〇名ほどのボランティアでまかなってきました」

美川憲二とラブリー郷

「ヒヤガーデン」の一つの呼び水となつたのが、「北九州観光流バナちゃん節」です。すっかり人気者になった愛甲さんと大川さんのコンビ。初舞台以降、地域の祭りやイベントでも引つ張りだになる中で、芸の幅を広げてきた。相棒の大川さんが美空ひばりのモノマネで「大川ひばり」、愛甲さんは美川憲一のモノマネで「美川憲二」に扮し、聴衆をとりこにした。

「もともと大川ひばりちゃんが一人でやっていたんですけど、衣装を着替えるのに時間が必要でしょう？ そのつなぎとして、私もモノマネするようになったんですよ」

美川憲一のウリである豪華な衣装は既製品を手づくりでアレンジして調達。メイクは奥様の手ほどきを受けた。衣装を身にまとうと、気持ちは「美川憲二」に切り替わる。

「おだまり！」歌の合間には、鼻にかかった声におネエ言葉でトークをかかめる。かと思えば、次の出番では黒テープで太い眉をつくり「ラブリー郷」に変身する。

「自分でも郷ひろみに似ているなと思っていたんですよ、顔が（笑）」とジョークを飛ばす姿は、どちらか

といえれば若人あきらかに似ている気もするが、プロ顔負けのモノマネを引下げ、老人ホームや児童施設も訪れる。さらに、平成四年には大規模な火砕流に飲み込まれた長崎県島原市の被災地を、平成一七年には新潟県中越地震に見舞われた同県川口町の被災地を慰問した。

「困難な状況に置かれていても、たくましく日々を生き抜いている皆さんの姿を見ながら、逆に、こちらが元氣をもらいましたね」

老若男女を問わず楽しめるモノマネ。皆が全身で喜んでくれる姿が、愛甲さんと大川さんを次のステージへと駆り立てる。これまでにこなしたステージは延べ六〇〇回あまり、年間約三〇回となれば、ボランティアとはいえ活動量はセミプロ級だ。

「休日を利用してステージに立つのですが、仕事や私用でどうしても都合がつかず断ることも少なくありませんでした」

芸達者が揃う「芸人バンク」発足

そんな悩みの解決策となったのが、昨年九月、市職員有志のアイデアで立ち上げられた「北九州市職員芸人バンク」。一二グループ、五三名（現一五グループ九五名）で発足し、モノマネ以外にもロックバンドやジャズバンド、



41歳のときから3年間、「青春座」という市民劇団に所属し、演劇の基礎を学んだ(左から2人目が愛甲さん)

マジック、パントマイム、落語など多彩な顔ぶれが揃う。

「芸を通して、市民と行政の壁を取り除き、絆を築きたい」

と発起人の一人である愛甲さんも意欲を燃やす。

一月には、市制四五周年記念イベントの二環として「北九州市職員芸人バンクフェスティバル」を催し、約八〇〇〇人の市民が見守る中、お披露目も行われた。

プロに出演依頼をすれば高額の出演料がかかるが、「北九州市職員芸人バンク」ならボランティアで場を盛り上げてくれる。老人ホームや児童施設に限らず芸人バンクへのニーズは高い。芸人バンクサイドとしても、お堅いと思われがちな市職員に対するイメージアップを図れて、市民サービスにもなる。登録した職員個人にとつても、多くの市民とじかに接することで市民目線を養うことができる上、芸を披露する機会が増えればモチベーションアップにもつながるだろう。一石二鳥どころか、それ以上のメリットが期待できる。

仕事とプライベートのハーモニー

「ワーク・ライフ・バランス」がしきりに叫ばれていますが、私はワーク・ライフ・ハーモニーのほうがしっくり

くると思いますね。仕事とプライベートがヤジロベエのように微妙に調整を図りながらバランスを取るのではなく、仕事とプライベートがうまく調和して、素敵なハーモニーを奏でられればいいなと」

愛甲さんが所属する子ども家庭局は、平成一九年、初当選を果たした北橋健治市長の肝煎りで、保健福祉局の子ども家庭課や保育課、教育委員会の青少年課、総務市民局の男女共同参画推進部などを統合して新設された。その男女共同参画推進部では、ワーク・ライフ・バランスの職員研修も担当する。これと並行して、男女が共に働きやすい環境づくりに取り組む企業と個人を表彰する「北九州市ワーク・ライフ・バランス表彰」も行う。

子ども家庭政策課の主たる任務である子育て支援については、昨年一〇月より「赤ちゃんの駅」事業も開始した。赤ちゃんの駅とは、外出中に授乳やオムツ替えなどで立ち寄ることができる施設で、板橋区が自治体初として取り組み話題になった。

「北九州市は、公共施設に加え民間施設にも設置しているところが他の自治体の取り組みとは異なります」

現在約一五〇カ所ある赤ちゃんの駅は、地域の賛同を得ながら日々増加中。赤ちゃん連れでも外出しやすい環境を



市内各所にある「赤ちゃんの駅」にはシンボルマークが掲示されている

整えるとともに、地域社会全体で子育て世代を支える意識の醸成を目指す。「私自身は子育てを妻に任せっぱなしでしたけどね。その分、孫の世話はしっかりとさせてもらっています」

二〇歳のときにホテルマンから転身し、二二歳で市職員として勤めるかわら夜間の八幡大学(現九州国際大学)法経学部に入學、二四歳で結婚、二五歳で大学卒業、そしてバナチャンコンテスト出場を契機に始まったボランティア活動、市民劇団・青春座への入団と、プライベートでも目まぐるしい日々を送ってきた愛甲さん。家族や職場の仲間など周囲の理解と協力があつて、見事なワーク・ライフ・ハーモニーを奏でてきた。

「多くの人の支えがあつて、今の自分がある。金儲けより、人儲け。人と人との絆こそ、人生を豊かにしてくれると思いませんか？」

多くの人を元気づけてきたその笑顔は、確固たる信念に裏打ちされている。(取材/ライター・しのだりょうこ)